以上のような特徴をもつ本書の議論は、学知の自明性を歴史的に相対化することを目指しながらも、最終的には、現代の教団が自明とする諸認識を相対化することに成功しているとはいいがたい。既存の認識の枠組みから仏教史研究を解放したいのであれば、現代の教団に対する現代的観点からの批判をいったん横におき、徹底的に教団外の視点から教団史を位置づけていかなければならないだろう。「真宗史研究を単なる歴史実証に終わらせない」（一一八頁）ことを目指しながらも、その前提となる歴史実証の基礎をどのように確立させていくのかが、今後の仏教史研究にとって重大な課題となることを、本書は示している。

（京都先端科学大学准教授）

平石直昭著
『福澤諭吉と丸山眞男——近現代日本の思想的原点』
（北海道大学出版会・二〇二一年）

河野有理

本書は、平石直昭氏が、これまで福澤諭吉と丸山眞男に関連して著した諸論文あるいは書評類を、改めて一冊に編みなおした論文集である。第一部が福澤諭吉、第二部が丸山眞男に関する二部構成で、全一三章、他に小伝が一篇、補論が五篇、書評が三篇（但し、書評や小文を組み合わせて一章を構成している場合もある）。初出のうちでもっとも古いものは一九八七年、もっとも新しいものは二〇一九年、その間はおよそ三十年という時間の幅があるが、それぞれの章には追記が付される他、それぞれの収録論文に関して詳細な後記が配されており、近代日本思想史の研究をリードしてきた著者のこれまでの研究を一望するのに便利である。まさに集大成的な一冊と言えるだろう。

但し、「集大成」といっても、収録論文の選択は機械的でも網羅的でもない点には注意が払われるべきである。たとえば、福澤とも丸山とも直接には関係のないように見える論文が収録されている。竹内好を扱う第一〇章及び書評3、三谷太一郎の著書を評した第一一章がそれである。またあるいは、主題的に

収録されていてもおかしくないにもかかわらず、未収録の論文がある。たとえば、「戦中・戦後徂徠論批判――初期丸山・吉川両学説の検討を中心に」（『社会科学研究』三九―一、一九八七年八月）がそれである。以上のことは、本論集が時期と論文タイトルによって「ソート」をかけただけの書物ではないことを示唆する。そこにはある狙いや意図があり、それに沿った形に編成されたまとまりや構造があるのである。

そうした観点から本書を見た場合、本書の構造のコアをなすのは第一部第二章「福澤諭吉の戦略構想」及びその続編としての第三章「「理論」と「政談」」であるように思われる。そのように見ていくと、第二部の丸山論についてもあくまで丸山の福澤論がその分析の主対象となっていることに気付かされる。つまり、本書は第一部と第二部で截然と分かれているのではなく、ともに福澤をその対象とする研究者として平石直昭と丸山眞男が対峙するという構図で読むことが可能なのである。したがって、本書の中心は上にあげた二論文であり、以下もこの二論文なかでも第二章の「戦略構想」論文を中心に叙述を進めていくことにして、各章の梗概や要約についてはこれを省略することとしたい。「戦略構想」論文を本書の中心と見定め論じていくスタイルが、書評として成功しているかどうかは読者に判断を委ねるほかないが、「戦略構想」論文が本書の中心を成すという認識自体の妥当性については、「戦略構想」論文に本書収録にあたって重要な注がいくつか追加されていること、また、本書刊行後すぐに第二章、第三章の解題および「続編」となる論考（「福澤諭吉をどう読むか――『学者安心論』の位置づけを中心に」、『三田評論』二〇二二年三月号）が刊行されていることをその傍証として挙げておきたい。

第二章「戦略構想」論文の最大の特徴は、その方法的な構え――歴史主義ないしコンテクスト主義――にある。福澤の代表作にして、近代日本最初のベストセラーたる『学問のすゝめ』は、研究史上ともすれば福澤諭吉の思想や哲学がそこに内包された体系的な書物として取り扱われがちであった。これに対し、本論文は『学問のすゝめ』がもともとは明治五年から明治九年にかけて一篇ずつ刊行され、全一七篇が明治一三年に合本として改めて出版されたという書誌的事実に立ち戻り、当時の時代環境――言うまでもないが、政治的・社会的・知的な激変期である――及び他の著作との関係においてどのような「戦略構想」がそれぞれの篇に込められているかを検討しようとするのである。

『学問のすゝめ』をバラバラに解体するこうした方法論的な構えは、あえて言えば、一見反丸山的であった。というのも、丸山こそ福澤に関する非歴史主義的読解を進めてきた張本人だったからである。たとえば、自身を「青年時代からいわば「歴史主義的」思考の毒に骨の髄まで冒された者」と規定しつつ、あえて「歴史的背景の詮索をひとまずヌキにして……じかに原典にぶつかって行く」ことを宣言した『「文明論之概略」を読

む』（一九八六年）において、そうした姿勢が自覚的に追求されていることは福澤研究史上、周知に属する。平石氏が福澤研究を進めるにあたって、こうした丸山の姿勢は当然意識されていたはずである。

この点を考えるにあたり興味深いのは、「書評：丸山眞男著『「文明論之概略」を読む』」（本書第一二章所収、初出時は匿名で『みすず』三一四号、一九八七年二月に掲載）であろう。ここで平石氏は、丸山の達成を高く評価しながらも、『文明論之概略』を「経典」として扱いその「注釈書」として自著を位置付けようとするその姿勢について「内容と形式の齟齬」（三七三頁）を指摘する。丸山の『「文明論之概略」を読む』（以下、『読む』）には、『文明論之概略』の厳密な注釈としての部分と、「氏自身による現代文明批評、ないし読者への問題提起」「アピール」としての部分が混在しており、そのことが「本書を一個の作品として見た場合にそれが持つ弱さ」であるというのである。

平石氏のここでの丸山批判が正鵠を射ているのかどうかは必ずしも自明ではない。またそれはさほど問題ではない。「歴史主義」に抗し直接原典との対話を志向する丸山の姿勢と、「注釈」と「アピール」を峻別する平石の態度が正確にかみ合っているというわけではおそらくないだろう。だがここからは、平石氏への方法的純粋さへの志向の強さが確かにうかがえるように思う。本来的に「流動的」かつ「混沌」としたものを「腑分け」し徹底的に「対象化」する作業が、意味連環の再構成に先立って進められるべきであるという強固な確信が氏には存在する。そして丸山の『読む』さえそうした基準をクリアしていない以上は、その作業は氏自身によって遂行される必要がある。

「戦略構想」論文における、平石氏の一見歴史主義・コンテクスト主義的な姿勢が持つ含意は、氏の主観に「内在的」に即してみた場合には、丸山があえて峻拒した歴史主義への回帰というよりは、上述の如き「腑分け」と「対象化」の作業の徹底化として見た方が、素直な解釈なのだと言えるだろう。

平石氏の主観に即した整理が重要なのは、それが「戦略構想」論文の意外なわかりにくさを解きほぐす手掛かりになるからである。「戦略構想」論文の意外なわかりにくさとは、それが方法論的には明らかに反・丸山的であるにもかかわらず、そこで描き出される福澤像は意外にもそうではないという点に存する。「戦略構想」論文の新しさは、丸山の福澤論よりもむしろ、方法論を共有する歴史主義的な立場から進められてきた先行研究と比較したときによりはっきりとするのである。どういうことか。以下見ていこう。

丸山自身が『読む』でも意識しているように、福澤についての歴史主義的研究にそれなりに分厚い蓄積がある。しかも、それらは丸山の初期福澤研究に刺激されて生み出されてきたという側面がある。たとえば、「福澤惚れによって福澤の真実にはとうてい到達できない」と啖呵を切る服部之総「福澤諭吉」（『改造』一九五三年一二月）の矛先は、正面から丸山眞男による

福澤選集第四巻「解題」（一九五二年）に向けられていた。福澤の内政論と外交論とを区別し、少なくとも内政論に関しては、「典型的な市民的自由主義者」として一貫し、個人的な自由と国家的な独立の間の「見事なバランス」「古典的均衡」が終始維持されていたと見る丸山に対し、服部は明治六年から明治十四年に至る福澤に二度の「戦術」的変化を認め、とりわけ明治十四年政変直前の福澤の一連の国会論に民権運動を「籠絡」する謀略としての性格を見いだすのである。服部の見るところ、「戦略」のレベルでは福澤は「市民的自由主義者」どころか一貫して絶対主義者であり続けており、そうした「戦略」達成の最適な手段としてその時々の「戦術」が変化したにすぎない。

服部の所論は、福澤の内政論における変化の契機を重視しつつ、そうした変化を「戦術」論にすぎないものとし、他方で「戦略」の次元では一貫性を認める点で――ただし、その評価は丸山とは正反対であるが――、丸山と実は立場を同じくしているというややこしさがあった。これに対し、遠山茂樹『福澤諭吉 思想と政治との関連』（UP選書、一九七〇年）は、服部の問題意識を深化させつつ、さらに精緻に福澤の「思想」と「政治」との関連を追跡していこうとするものであったと言える。遠山はやはり丸山の選集解題（一九五二年）を主たる論敵として取り上げ、その内政・外交峻別論自体を厳しく批判する。当該期の福澤において、その内政論と外交論は言うなれば相互浸透しており、丸山が福澤の外交論に認めた「地殻の論理自体」に及ぶ変動は実はその内政論にまで及んでいるのではないかというのである。

服部が一貫した謀略家として福澤を描いたとしたら、遠山が福澤に見いだしたのはいわばその挫折であり、「逃避」であった。遠山によれば、『学問のすゝめ』第七篇（明治七年三月刊）とそれ以降には明らかに断層が存在し、それが意味するのは福澤の民権運動にたいする「態度決定からの逃避」（遠山、七一頁）である。そのころから、対外的危機の昂進にことよせた挙国一致・官民調和論的主張、「政体の問題と引き離された……人権の主張への限定と、自由民権運動への傍観者的批判」が福澤の基本的な姿勢となる。そのことが結局、『文明論之概略』第九章と第十章の間に「論理的な間隙」を生み、「無原則な機会主義」に陥るという帰結をもたらした、遠山はそのように論ずる。

平石氏に先立って、遠山がすでに『学問のすゝめ』の内部に存在する亀裂に着目し、当時の政局との関係――具体的には政府当局者と民権運動双方への距離感――及び『文明論之概略』との関連に着目していたことは重要である。平石氏の所論は、基本的に、遠山とその方法論的構えを同じくしつつ、遠山とは異なる福澤像を描こうとするものと言える。その福澤像は、これまたあえて言えば、丸山的なものである。遠山が、挫折し転向する福澤像を描いたとすれば、平石氏は、丸山がかつて福澤に見いだした「古典的均衡」を、精密な「腑分け」を遂行しつ

つ、ふたたびいわば動的均衡として再構成しようと試みたと言えよう。

精密な「腑分け」の手さばき、史料批判の厳密さと史料操作の見事さが平石氏の本領であることは多くの人が認めるところであろうから、再構成された福澤像が丸山のそれに結果として似てくることについてことさらに言い募るのは野暮というものかもしれない。とはいえ、それは単純な丸山の模倣ではない。平石氏は、福澤の「戦略構想」を析出するにあたり、「状況認識」と「役割規定」という分析概念を用いる。ここで「状況認識」とは単に同時代の政局についての福澤の判断にとどまらず、およそ明治維新の来し方と行く末についての「文明史」的展望を含む。氏は福澤の明治維新認識（無論、当然、当時における同時代史認識である）をとりわけ重視し、そうした時代認識が福澤の「役割意識」を規定していたと見る。福澤の論調の変化は、多くの場合、この福澤が自身に課した「役割意識」「役割規定」の変化――「親玉の御師匠番」か「読書渡世の一小民」か、「文明の理論家」か「外交の政論家」か――として説明可能である。思想を単なる状況の従属関数として解釈するという歴史主義的な方法が陥りがちな隘路を越えて、氏は福澤の思想における「進歩」の跡」、「思想固有の発展」を追跡しようと試みるのである。

かくして、遠山が、『学問のすゝめ』の第七篇を福澤の民権運動への最接近とみなし、第十二篇として予定された（結局は別の篇に差し替え）「内は忍ぶべし、外は忍ぶ可らず」との間の論調の変化を重視するのに対し、平石氏の方は、政治からの距離の確保を説く『学問のすゝめ』第四篇「学者職分論」と、「国権可分の説」（明治八年六月）との間のギャップに福澤の葛藤を見る。この時期に、ある種の変化を検出する点では両者は共通するのだが、平石氏にとってそれはあくまで「戦線整理の必要」（八七頁）であって、挫折や転向、まして変説とは到底言えないのである。

かかる分岐の延長線上に両者の官民調和論理解も置くことができる。福澤における官民調和論の起源について、『全集緒言』における本人の証言を却下しより後年にその端緒を求めようとする遠山に対し、氏は福澤の証言を素直に採用し、明治九年二月の『学者安心論』の段階では確実に「官民調和論」の立場にあり、（ここが重要なのだが）そうした立場は『学問のすゝめ』第四篇の議論の射程にすでに含まれていたと解するのである。官民調和論もまた、氏にあっては挫折や転向ではなく、思想内在的な「発展」として把握されるのである。

福澤における「変化」の側面を、「役割規定」の自覚的スイッチバックによって説明しようとする氏の議論は魅力的である。とりわけ、遠山が「論理的間隙」として把握するしかなかった『文明論之概略』第九章と第十章の間にある断層はこの視点によって見事に説明されているように思われる。氏の議論を経た後では、遠山の理解がなるほど「思想を状況の従属関数」に還

元している部分が目に付くようになる。

ただ、変化を説明するに際し、それが「挫折」や転向なのか、それとも「戦線整理」の末の「論理的内在的な発展」なのかの判定は極めて困難であることもまた確かである。この点において問題なのは、氏の福澤論が「未完」であるということだろう。それが「論理内在的な発展」であるかどうかは、明らかにそうではない場合との対比において論証される必要があろう。それを変説や転向と呼ぶかどうかはともかく、福澤の議論において「論理内在的な発展」ではない変化が存在するのかどうか。それが存在するとしたらそれはどのようなものか。そうした変化が彼の「役割規定」の切り替えとして説明できないのはなぜなのか。そうした点が本来は検討される必要がある。それにもかかわらず、本書においては福澤の思想における「論理内在的な発展」の追跡は第二章と第三章（及び『三田評論』所収の論文）、時期的には明治十年前後で終わっており、その後の明治十四年政変、いわゆる「脱亜論」前後の外交政略論、『時事新報』社説執筆期については、研究史の整理や他者の研究の書評、もしくは執筆者の推定といった基礎的・間接的な接近にとどまっている。福澤における「論理内在的」ならざる変化の存在が推定されるこの時期について、氏による本格的な検討がなされたとき、本書ははじめて真の意味で完成するのだと言えよう。

（法政大学教授）